OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	河井寛次郎の建築意匠 : 民芸運動による建築的成果
Author(s)	石川, 祐一
Citation	デザイン理論. 2005, 46, p. 5-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53238
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

河井寛次郎の建築意匠
── 民芸運動による建築的成果 ──

石川祐一
京都市文化財保護課

キーワード
河井寛次郎，宮地米三，民芸運動，民芸風建築
KAWAI Kanjiro, MIYAJI Yonezo
Mingei Movement, Architecture
influenced by Mingei Movement

1．はじめに
2．建築以前
3．河井寛次郎の建築作品
4．建築意匠の特徴
5．河井寛次郎の建築意匠の影響
6．ま と め

1．はじめに

民芸運動の活動が建築作品を残したことは，個々の建築事例において知られている。陶芸家として民芸運動の主要メンバーであった河井寛次郎（1890～1966）も，幾つかの建築作品を残した。河井の建築作品の一部は既に事例紹介がされているが[1]，彼の建築における活動の全体像や特質を考察した研究は見られない。よって，本稿では既に知られている作品に加え，これまでに報告されていない河井の建築作品を報告し，彼の建築分野における活動の全体像と特質を考察する。そして，河井の作品が戦後の「民芸風」「民芸調」建築に与えた影響について考察したい。

2．建築以前

陶芸家・河井の業績は周知の通りであり，ここでは建築作品を考える上で必要な部分について簡略に述べることとしたい。河井寛次郎は，明治23年（1890），島根県安来町（現安来市）に生まれた。父，大三郎は棟梁であり，兄，善左衛門が大工業を継いでいた[2]。大正3年，東京高等工業学校（現東京工業大学）窯業科[3]を卒業。後に民芸の運動を共にする浜田庄司は，同学科の後輩であった。

家業を大工とする河井が建築に親しんでいたことは想像に難くないが，彼が初めて建築作品

と関わったのは，民芸運動においてである。

昭和３年（1928），東京・上野で開催された御大礼記念博覧会において「民藝館」が建築された[4]。民藝館は，博覧会パビリオンとして出展された木造平屋建ての建築である。これは，民芸運動が具体的に残した最初の建築的成果でもあり，河井もメンバーとして関与している。柳宗悦が主に設計を行い，メンバーらによって内装や調度品が制作された。民藝館は，後に，実業家，山本為三郎の邸宅の一角に移築され，「三國荘」と名付けられた。この移築についても，浜田とともに河井が参加している。

また，昭和11年（1936）には東京・駒場に「日本民藝館」が竣工した。設計は吉田享二博士の助言を得て柳宗悦が行い，栃木県の大工，磯部文吉が施工している。この設計に際しては，メンバーの意見も取り入れられたとされる[5]。

３．河井寛次郎の建築作品

(1) 土橋嘉兵衛邸

土橋嘉兵衛邸は，京都市内玄琢の地に，古美術商の土橋嘉兵衛[6] の邸宅として昭和９年（1934）に建築された。嘉兵衛は，民芸品の扱いも手掛け，民芸運動の支援者，大原孫三郎は彼の顧客であった。この縁から，邸宅の建築に当たり，大原から河井を紹介されたと言われる。河井の他，柳ら民芸のメンバーが設計に参画したとされる[7] が，柳の著作からは，設計は嘉兵衛の指示を仰ぎながら，河井が行ったものと判断される[8]。施工は，数奇屋大工として知られる内藤源七が手掛けており，内藤の描いた平面指図が残っている。

外観は，瓦屋根を重層的に並べた外観をとる（図１）。むしこ窓の付いた千鳥破風を設ける点は京都の民家とは異質であり，後述するように郷里・安来の影響をのぞかせている。

むしこ窓の意匠は，各地の町家や農家に見られる意匠であり，京都の街道沿いの町家，農家にも用いられている。この点では，京都近郊の農家の意匠に違和感を与えないことで，地域との調和に配慮を見せているものと推測される[9]。

平面（図２）は２階建ての東側と平屋建ての西側とに分かれ，やや角度が振られて接続している。東側部分は，中央の式台玄関の上手に座敷，下手に台所を配する民家的平面を基本とするが，台所の下手に居間を配したり，北側の廊下によって各室を結ぶ点に，平面における工夫がみられる。

北側廊下により西側部分へとつながり，西側部分の中心には板間が設けられる。この部屋は現在仏間となっているが，指図（図３）には囲炉裏が記されており，また，天井に煙抜きが設けられていることから，当初は囲炉裏があったことが確認できる。現仏間の棚には朝鮮風の文様が用いられている[10]。この囲炉裏の間を中心に2室（指図記載では，寝室とオンドル室）が

河井寛次郎の関与した建築作品一覧

建築年代	名　称	所在地	構造	内容	設計者	施工者	現存	囲炉裏	段差	囲炉裏の間の形式		朝鮮床
昭和９年（1934）	土橋邸	京都市玄琢	木造２階建	設計		内藤源七	○	●		椅子座	板間	
昭和12年（1937）	河井自邸	京都市五条坂	木造２階建	設計		河井善左衛門	○	●	●	両形式	板間	●
昭和13年（1938）	日本民藝新生活品展覧会	大阪・阪急百貨店	モデルルーム	内装設計			×	●	●	両形式	板間	
昭和14年（1939）頃	西村邸	京都市本町	木造２階建	内装設計		小城組	○	●		ユカ座	畳敷	
昭和14年（1939）	竹葉亭	神戸市三宮	ＲＣ造	設計指導	宮地米三	竹中工務店	×	●		椅子座		
昭和22年（1947）	亦楽窓	大阪府柏原市	木造２階建	内装設計			×	●	●	両形式	板間	●
昭和34年（1959）	ひさご家	鳥取県米子市	ＲＣ造３階建	設計指導	宮地米三		○	●		椅子座	板間	●
昭和39年（1964）	歓喜院	京都市鞍馬	ＲＣ造４階建	設計指導	宮地米三	林組	○	●		両形式		

図１　土橋邸外観

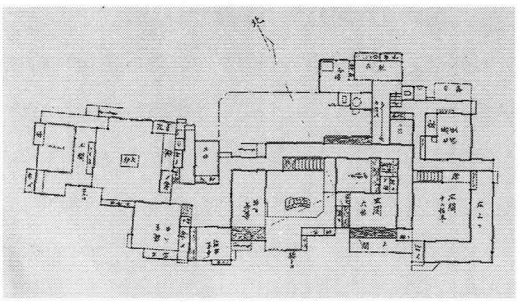

図２　土橋邸設計時指図（『数奇の工匠・京都』）

図４　土橋邸台所

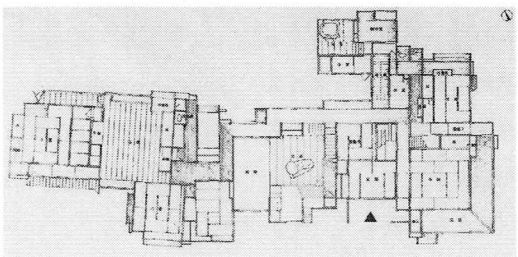

図３　土橋邸現状１階平面図（『数奇の工匠・京都』）

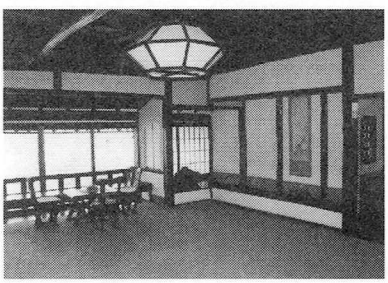

図５　土橋邸仏間

配されている。

内部空間において特筆すべき点は，台所（図４）と囲炉裏の間〔現仏間〕（図５）であろう。台所は，天井を吹き抜けとして小屋組みを現わしている。踏み込み土間以外は板間とし，この板間の中央にカマドが据えられ，意匠のポイントとなっている。そして，中２階（現在は押入として使用）へと続く階段が設けられている。吹抜けの空間の一部に階段を設ける空間構成と，囲炉裏の間の存在は，後の自邸の空間における手法と共通している。

これに対して，座敷や茶室などには民家風の意匠は見られない。土橋邸には，伏見稲荷茶屋の写しとされる茶室（玄庵）が設けられている。これは，土橋の好みが反映され，数奇屋大工の内藤の手腕が発揮されたものと思われる。

(2) 自邸〔現河井寛次郎記念館〕

河井は，大正９年（1920），京都五条坂に町家付の敷地を購入し，この町家を取り壊して，昭和12年（1937）[11]に自らの設計で自邸[12]を建築した。施工は，安来から呼び寄せられた大工棟梁である兄，善左衛門が行っている。自邸は，河井の建築作品のうち，全体を通じて設計，施工監理を行い得た唯一の作品であり，独自の手法の試みが最も顕著に表れていると思われる。

外観（図６）は，妻入の寄棟造で，２階部分を１階よりも張り出して庇を設けない形式とし，京都の町家とは異なる外観意匠を持つ。京都の伝統的な町家は平入の切妻造であり，こうした形式は見られない。河井の郷里，安来では，大型の町家は妻入の形態を取っている[13]。奥行きの深い平面を構成する際には妻入とする方が合理的であり，後述するような河井の近代的思想に由来することも否定できないが，同時に，河井の郷里に対する憧憬を考慮する時，自邸における妻入の採用は，河井の親しんだ郷里の形式を踏襲したものとも推測される。また，２階部分を１階よりも張り出して庇を設けない形式は，特に飛騨や信州の中山道沿いの町家などに顕著に見られる形式であり，京都の町家には同形式は見られない。

河井は「切り妻の二階建ちの瓦屋根と，白壁の続いた町の通りは，今からすればどうしてかうも，みごとにお互いが住み合へるものかと，思はないではゐられないやうなととのった町」と[14]郷里の町並みの美しさを述懐する。ここには，郷里の町並みへの憧憬とともに，調和の美しさへの評価が見られる。また，河井は，山城南部のとある集落の美しさを，「自分はいつもこの偉大な設計者の前に立って驚かない訳にはゆかない」[15]と語り，予定調和による美を評価している。

郷里の形式に倣い妻入形式をとりつつ，平入の町並からの逸脱を避けるならば，寄棟屋根とするのが一番自然な方法である。こうした点に，郷里・安来や飛騨，信州地方などの民家形式を取り入れる創造的意思の一方で，周囲の町並に配慮する意識が指摘できるのである。

平面（図7，8）は，北側に通り土間をとり，これに沿って表側に和室2室，中央にほぼ3間半四方の板間である「広間」，裏側に2室を設ける。こうした中央の大きな板間を中心に居室を配する平面は，京都の町家には見られず，他地方の民家から影響を受けていると考えられる(16)。

「広間」は当初より椅子座として使用された。表裏側の和室は，広間よりも約300mm床面を上げている。階段（梯子段）は広間に設けられる。2階は広間の上部に設けられた吹き抜けに面して，廊下と板間の書斎が取られている。この表側に2室，裏側に2室（座敷，次の間）を配する。

内部空間で注目されるのは広間（図9）である。2本の大黒柱を見せ，天井は根太天井とし，一部を吹き抜けとする。安来など島根県東部の町家では，土間境の畳室（ナカノマ）を吹き抜けとする構成が見られる。また，飛騨地方の町家では土間境のヒロマを大きな吹き抜けの板間とするのが特徴である。このように外観に見られる特徴と同様，平面においても，安来や飛騨などの町家への意識を推測することができる。また，吹き抜けのある中央の大きな部屋を中心とした平面や，ここから2階へのアプローチをとる手法はモダニズム住宅の空間構成とも類似することが指摘できよう。

広間には，奥よりに囲炉裏が設けられている。囲炉裏端より裏手の部分は床面を上げて（約220mm）畳敷きにし，椅子座とユカ座を接続している。この囲炉裏周りの手法は，自邸以降の作品に現れるものである。そして床には朝鮮風床板張りが用いられている。

座敷，次の間の床回りなどを除き，全体として柱材は墨を混ぜたベンガラ塗りで古色仕上げとしている。特に，広間や2階の吹き抜け回りには，チョウナ仕上げの材が用いられている。

以上のように，郷里・安来，信州・飛騨地方，朝鮮といった他地方の民家意匠を取り入れている。内部では，広間の空間が特筆されよう。土橋邸において個別に現れた，吹き抜け空間と囲炉裏は一つの空間に構成され，椅子座とユカ座を接続する独特の囲炉裏周りが出現している。

(3) 大阪阪急百貨店「日本民藝新生活品展覧会」モデルルーム

「日本民藝新生活品展覧会」は，大阪阪急百貨店において昭和13年（1938）5月15日から22日まで開催されたもので，河井は客間（図11），書斎，台所の3部屋のモデルルームを設計している(17)。客間には囲炉裏が設けられ，床面を3段に分けている。板間にはテーブルと椅子が置かれ，囲炉裏を介して一段床高を上げている。さらに，その奥には床を持つ畳敷きの上段が設けられる。各室には民芸品を置く棚が備えられている。また，台所には朝鮮風の板敷きが確認できる。

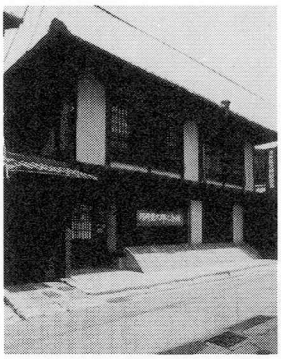

図6　河井自邸外観

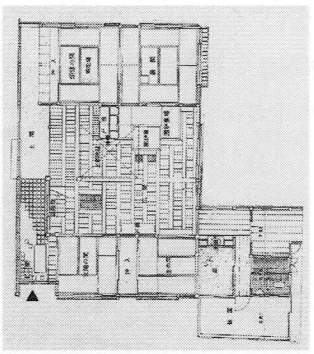

図7　河井自邸現状1階平面図
（『現代和風建築集7』）

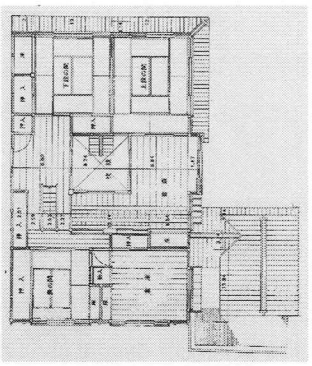

図8　河井自邸現状2階平面図
（『現代和風建築集7』

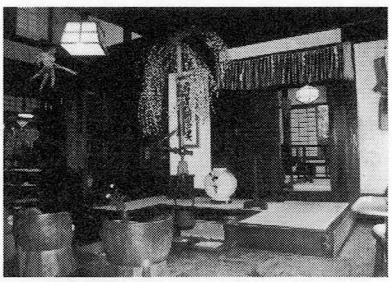

図9　河井自邸広間

図11　阪急大阪店モデルルーム客間

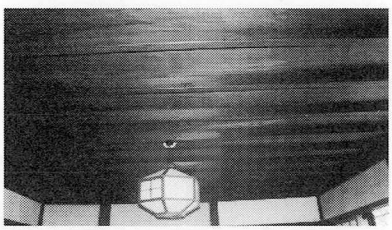

図10　河井自邸　1階和室天井

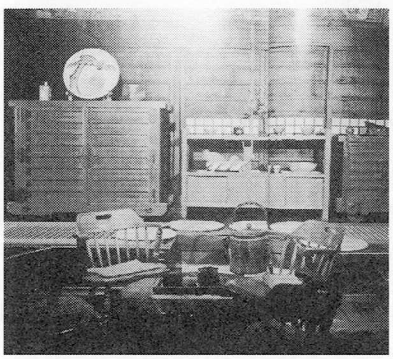

図13　亦楽窓板間

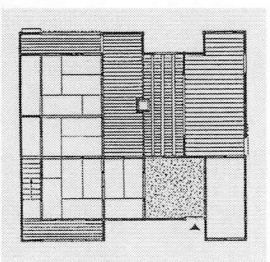

図14　亦楽窓想定平面図

図12　西村邸座敷

(4) 西村邸

西村邸は，京都五条坂に程近い地の，民芸同人である西村辰三郎邸の町家建築の座敷を，河井の設計によって改修したものである（図12)。改修年代は昭和14年（1939）頃[18]である。座敷は，和室の一部分のみを板床とし，この部分に囲炉裏を設ける。畳面と板面の段差は畳の高さ分のみである。

板床部分の壁面には框高の高い床と展示用と思われる棚が設けられている。天井は化粧の太い材を根太風に見せているが，板床の上部のみは天井高を一段上げ，意匠として小さな庇を取り付けている。

(5) 亦楽窓（現存せず）

亦楽窓は，河井の支援者であった川勝堅一（当時高島屋常務取締役）が大阪府柏原町（現柏原市）の農家建築を購入し，河井の内装設計，能勢勝太郎（当時高島屋営繕部長）の施工監理により昭和22年（1947）に改修されたものである。川勝によれば「民族的日本住居として，且，ギャラリーを兼ねた用途」として構想された[19]。平面は移築前の農家の平面をほぼ踏襲している（図14)。

写真から，内部意匠は，基本的に民家本来のものを生かしていると判断されるが，その中で1階の2室の板間は注目される。当初は土間だったものと推察される板間は，土間上の吹き抜けを強調した空間とする。また，本来ダイドコロに当たると考えられる板間（図13）には囲炉裏が設けられ，囲炉裏を挟んで床面を一段上げている。下段の部分には椅子を置き椅子座に，上段の部分にはむしろ製の座布団を引いてユカ座に使用している。また，下段の床には朝鮮風床板張りが用いられている。

一方，2階は「ヨーロッパ中世風の山荘」[20]と述べるように，洋風意匠のギャラリーに改修されている。これは，施主である川勝の意向が強く働いているものと思われる。

4．建築意匠の特徴

(1) 平　面

平面設計を行うことのできた土橋邸，自邸では，伝統的な民家の平面から逸脱していない。だが一方で，土橋邸での廊下の配し方や，自邸での広間を中心とした平面，階段の設け方，椅子座とユカ座を接続する手法などに近代住宅の要素が随所に認められる。

(2) 外観の意匠

外観意匠を行った作品を見ると，周辺地域の民家意匠から全く逸脱することはない。これは

周囲の景観への配慮が外観デザインの要素となっていたことを示しているものと思われる。

一方で，いずれも郷里・安来や信州，飛騨など，他地方の民家意匠の要素を用いている。

(3) 内部意匠の構成要素

内部意匠の個々の要素として次のようなものが上げられる。

- 古色仕上げ材：古色仕上げの手法は，河井の建築作品に共通してみられ，民家風の表現の重要な要素となっている。自邸では意匠的にチョウナはつりを施している。チョウナはつりは，数奇屋造りにも「なぐり」として用いられるが，ここでは民家に用いられる手法を採用している。自邸に建築された茶室的空間である「小間」にも数奇屋的意匠が見られないことからも河井が数奇屋の意匠から影響を受けた形跡は伺えない。チョウナはつりを古色仕上げとともに用いることで，民家風意匠をさらに強調しているものと考えられる。
- 根太風の天井：棹縁を太くすることで根太風の印象を与える天井で，自邸において用いられている（図10）。自邸以降の作品では，根太を模した天井へと変化している。
- 朝鮮風床板張り：河井は大正8年，浜田庄司とともに朝鮮，満州旅行に出かけ，朝鮮建築の美を賞賛しており[21]，朝鮮風意匠を床張りによって表現したものと考えられる。
- 陳列用棚：河井の作品には，共通して陳列を意図したものと思われる棚が設けられている（実際に陶磁器など民芸品を置いていることが多い）。また，床についても框高を高くするが，これも陳列スペースを意識したものと考えられる。

これらの諸要素は，日本の民家意匠の要素の引用に止まっておらず，朝鮮風や河井独自の意匠が表現されたものといえる。

(4) 囲炉裏の間の意匠

民家風意匠の表現として，河井独自の手法が囲炉裏の間の意匠であろう。作品には一貫して囲炉裏が設けられている。河井の囲炉裏への執着は，後に「直火のあの現象というものは，わしは神聖で大事にしなきゃならぬものだと思うね。（中略）だから囲炉裏へいってごらんなさい，だれも話をしなくてもいいんだよ，あの火を見ていると」[22]と語っているように，火への崇敬の念，そして直接的に火とともにある空間の豊かさへの憧憬に由来するものと推測される。

囲炉裏を挟んで段差を設け，椅子座とユカ座を接続する点は河井独自の手法と言える。土橋邸では，囲炉裏周りには段差はなく，自邸において採用された後，確立されたと推察される。自邸では上部に吹き抜けを設けることで，一層効果的な表現となった。この独特の囲炉裏周りの形式は，座敷の改修であった西村邸を除き，その後の作品にも現れる。

尚，河井が囲炉裏の間を描いた幾つかのスケッチが残されている[23]。大部分が時期不詳の

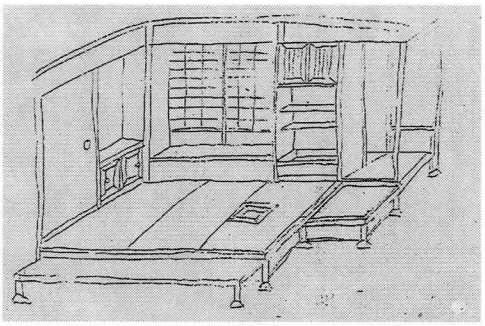

図15　スケッチ①

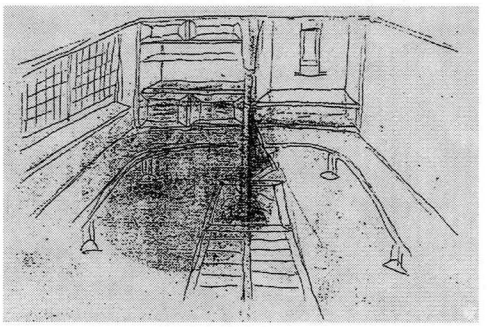

図16　スケッチ②

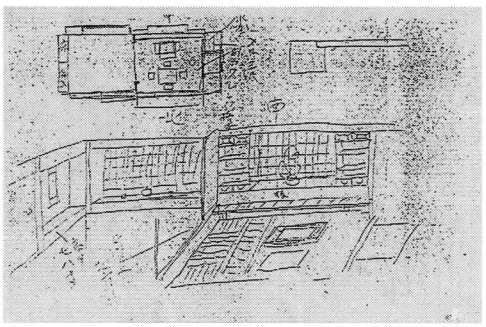

図17　スケッチ③

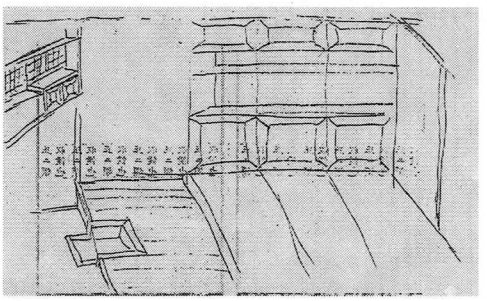

図18　スケッチ④

ため，その前後関係は不明である。これらは，①畳敷きに囲炉裏が切られているもの（昭和17年の署名あり）（図15），②中央を一段高くして囲炉裏を設け，周囲に腰掛けが廻るもの（図16），③段差を設けず囲炉裏を設け，板敷床（朝鮮風）とするもの（図17），④囲炉裏を介して段差を設けるもの（図18），が見られる。これらは，河井が自らの意匠表現として囲炉裏の間に執着し，その表現を模索していたことを示している。

5．河井寛次郎の建築意匠の影響

河井の内部意匠の表現は，設計指導を通して建築家の宮地米三[24]へ影響を与えていることを確認できる。二人の交流は，昭和14年（1939）の竹葉亭の内装設計に始まる。当時，宮地は竹中工務店神戸支店設計部におり，「私が民家調の建物の設計に入ったきっかけが，五条坂の陶芸家河井寛次郎先生の御指導を得て，戦前（昭和十二年頃）神戸の竹葉亭を始めてやった時です」[25]と語っている。

竹葉亭以後，ひさご家（1959），歓喜院（1964）において，建築設計を宮地，助言・内装設計を河井が行うという関係が続いた。

(1) 竹葉亭

竹葉亭は，神戸・三宮の鉄道の高架下空間を利用した鰻料理の店舗である。民芸同人のオーナーが，内装や器などを民芸で統一することを目指して，昭和14年（1939）に建築された[26]。宮地が設計を担当し，河井が設計指導を行った。

竣工当初の写真（図19，20）では，内部は太い材を用いて真壁造りの意匠とし，太格子を用いている。また，天井は根太天井に見せるなど，民家風の意匠で統一している。店内は椅子席を主とし，ビアスタンド部分の大きなテーブル上に囲炉裏が設けられており，冬季には実際に使用したとされる。尚，壁面には西村邸と同様の民芸品を置く棚が造られている。

(2) ひさご家

ひさご家は，河井の郷里・安来に程近い皆生温泉のＲＣ造３階建ての旅館である。宮地米三が建築設計を担当し，ラウンジを中心に内装設計を河井が設計し，昭和34年に竣工している[27]。建物は合掌造りを思わせる外観である。ラウンジ（図21）は，朝鮮風床板張りの板間を椅子座で用い，テーブル式の囲炉裏を設けている。陳列用の棚が見られる。尚，室内には河井が郷里・安来の職人に指導して製作された家具・調度類が配されている。

(3) 歓喜院〔現修養道場〕

歓喜院は，京都，鞍馬寺の宿坊として，昭和39年（1964）に建築されたＲＣ造４階建ての建築である（図22)。竹葉亭と同様に，宮地米三が設計を担当し，宮地の依頼により河井が設計指導を行った[28]。宮地によれば「京都の町家，飛騨高山の町家等に心を引かれ，その町家の細部の要素を取り入れ」ている。また，「先生が今度は建物内部の飾り付けに力を入れて下さっているので」[29]と語っていることから，河井の設計指導は内部の意匠を中心としたと考えられる。

１階ロビー（図23）は椅子座のフロアだが，一部分の床面を上げ，ユカ座用の部分を設けている。この部分にはテーブル式の囲炉裏が造られており，囲炉裏を挟んで椅子座と起居座の両形式を接続する手法が用いられている。

内部意匠では，真壁造や根太天井風の造作を表現するために，ＲＣ造の構造体に古色仕上げ材を表面に貼り付ける手法が用いられている。

(4) 宮地の意匠

これらの作品は，ＲＣ造の構造体の中に付け柱などにより民家風意匠の内装を施すものである。その意匠は，根太天井風，古色仕上げ材，囲炉裏など，河井の作品に見られた要素を取り

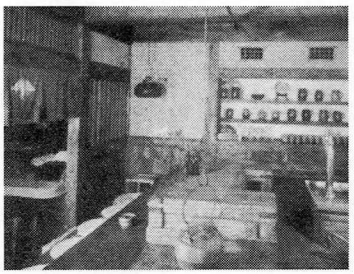

図19　竹葉邸内部囲炉裏

図20　竹葉邸内部

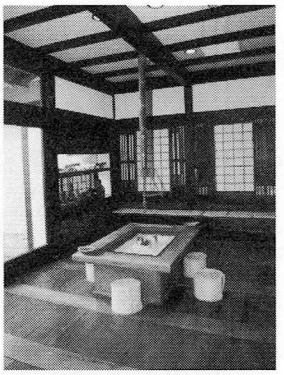

図21　ひさご家1階ラウンジ

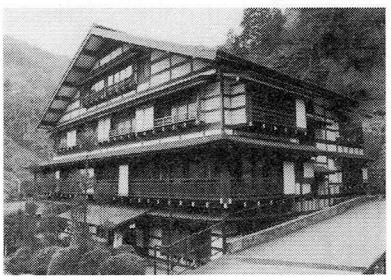

図22　観喜院外観

図23　観喜院1階ロビー

入れている。

「椅子式と坐式との，目の高さの相違による，椅子に調和する「床の間」の形式をどうするか等」[30]について悩んだと述懐しているように，宮地は椅子座形式における民家風意匠を模索した。戦後，宮地は，数多くのいわゆる「民芸風建築」を残したが，竹葉亭で採用したテーブル式の囲炉裏は，以降の作品にも多数見られる[31]。このことから，宮地がテーブル上に囲炉裏を設ける手法は，宮地の発案による可能性が高い。

河井の造形した意匠は，宮地のフィルターを通して，構造から乖離した見せかけの表現として伝わって行ったのである。

6．ま と め

河井の作品には，平面，内部意匠など全体として，日本の民家風意匠が基調に用いられている。こうした民家風意匠には，郷里の安来，飛騨などといった，地域の文脈から離れた他地方の意匠や，河井が高く評価した朝鮮民家の意匠が採用されている。しかし，河井の建築空間には民家意匠の引用に止まらない独自の造形手法が見られる。

河井の造形や空間構成の手法は，土橋邸において一部が試みられ，自邸において確立してい

るといえよう。自邸以後，建築全体を設計する機会がなかったため，これらの手法は部分の意匠として表現されるに止まったと考えられる。

「三國荘」について，河井は「近来地方の古農家が都市の邸内に取り入れられつゝある様」とは異なり，「自分達の身體から割り出して作って貰った家」であると言っている。そして「國土の民の一人」である「吾々の身體の中に刻まれた祖先の寸法を尊重」したものだと語っている(32)。河井は日本の「民族」固有の建築表現を意識していたことがわかる。河井の目指したものは，いわゆる民家趣味とは異なり，日本固有の新たな建築空間ではなかったのではないだろうか。

自邸建築の昭和12年，余った木材を使用して猫と童女などを彫ったことに始まった河井の木彫は，昭和25年以降，京仏師の松久武雄（宗琳）の助力を得て本格化した。河井が陶土で造型し，松久の作業の後，河井が仕上げを行ったとされる。この手法で，手，人物，動物像などが製作された。特に昭和33年頃から36年にかけては，キュビズムを思わせる造形的な木彫面が造られている(33)。

陶芸においても，昭和16年頃より，作風の変化が見られることが指摘されている。それまでの民芸風のものから自由な造形へと向かっていくのである(34)。

河井のこうした造形への自由なはばたきを追って見るとき，建築空間の造形の作業がもたらした影響を推察することができるのではないだろうか。建築という作業に関わることで，河井の陶芸が造形的な広がりを得たのではないかと考えられるのである。

河井の陶芸や木彫の製作手法は，全てのプロセスを自ら行うものではない。この点で，河井はデザインの人であった。自らの造形に対して全てを自ら物質的に製作することに執着しない精神は，後年「機械は新しい肉体だ」(35)と語ったこととも整合性を見せるのではないか。

宮地との共同作業において，ＲＣ造の建築物に張りぼての意匠を施すことで，構造と意匠の乖離が生じることに対しても，河井は異議を唱えていない。単に民家の意匠を引用するだけではなく，独自の造形を模索すること，そしてＲＣ造という新しい工法をも肯定することによって，河井は日本の民族固有の建築表現を目指したのではないだろうか。

河井の造形した建築空間は，建築家・宮地米三というフィルターを通し，ステレオタイプ化を伴って受け継がれた。貼りぼて式の「河井風」は，河井の目指した建築表現とは別に，後の民芸風建築ブームへと繋がっていったと考えられるのである。

〔後記〕本稿は，日本建築学会近畿支部発表（2002年度）における口頭発表原稿（研究報告集）に，新知見を加えて再構成し，新たに書き直したものである。本稿を書くにあたり，河井寛次郎記念館学

芸員・鷺珠江氏をはじめ，建物所有者の方々等，多大なるご協力を頂いた。ここに謝意を表したい。

（注釈）

(1) 伊藤ていじ，横山正監修『現代和風建築集７・民家の伝統』（講談社，1983）には，河井寛次郎自邸（河井寛次郎記念館）及び土橋（嘉兵衛）邸が紹介されている。自邸では，民家風の外観，囲炉裏の空間などが河井独特の意匠であるとされている。また，中村昌生編『数寄の工匠・京都』（淡交社，1986，p. 194）には土橋嘉兵衛邸が紹介されている。

(2) 略歴は『河井寛次郎と仕事』（河井寛次郎記念館編，1976）pp. 134-159に基づく。

(3) 『東京高等工業学校一覧　従大正三年至大正四年』によれば，窯業科において建築に関する係の必修科目はなく，図案，製図（機械，築窯）があるのみである。

(4) 『工藝』60号（1936）に三国荘が特集されている。写真から判断すると，その意匠は基本的に和風住宅であるが，内部には中国風，朝鮮風，洋風の意匠が用いられている。柳宗悦によれば，応接室のマントルピースが浜田庄司によると記されているが，河井への言及はない（柳「三国荘小史」『柳宗悦全集著作篇第十六巻』筑摩書房，1981，p. 26）。三国荘については，前出『現代和風建築集７・民家の伝統』p. 214や，佐々木潤一による考察がある（「柳宗悦最初の「民藝館」三国荘の意義 ── 半世紀を経た民藝運動」『日本の眼と空間 ── もうひとつのモダン・デザイン』セゾン美術館編，1990）pp. 55-57。

尚，三国荘は第二次大戦の戦災によって焼失したとされてきたが，川島智生は遺構が現存していることを報告するとともに，遺構の建築的特長を考察している（「醸造家と建築25・三国荘 ── 山本為三郎別荘」『醸界春秋』49号，1998，pp. 48-53及び「三国荘の発見」『民藝』98年８月号 pp. 14-22）。なお，「三國荘」では，後に河井の作品に見られる囲炉裏や朝鮮風床板張りは確認できない。

(5) 民藝品を展示する施設として，東京・駒場に建築された。設計は柳宗悦が行い，栃木県の大工，磯部文吉が施工している（「日本民藝館」（『柳宗悦全集著作篇第十六巻』筑摩書房，1981）p. 177。

(6) 京都の古美術商。聞取りによれば，嘉兵衛は，民芸品の扱いも手掛け，民芸運動の支援者である大原孫三郎は顧客であった。この縁から，邸宅の建築に当たり，大原から河井を紹介されたとされる。

(7) 前出『現代和風建築集７・民家の伝統』。川島智生「玄琢山荘の成立と建築特徴について」『民藝』（2002年６月号）において，川島氏は三國荘の影響を指摘している。

(8) 柳は，「河井でなければ出来ない間取り，骨組，建具であった。〔中略〕途中で老人の好みも我儘に入って来るから，河井の思ひ通りとは行かなかったかもしれぬ。」と記している（「蒐集物語」『柳宗悦全集著作篇第十六巻』筑摩書房，1981）p. 609

(9) 昭和８年の秋に，「洛北鷹ケ峰から丹波の小野郷へ越す杉坂峠の聚落，堂の庭」を通った際に，河井は一軒の農家に立ち寄っている。「住居の半分近くもある台所の土間の中には磨かれた七つ竈が恰度身体の中の胃袋のように，この家を養うにふさわしい大きさと光沢と見事な構造を示している。」「台所の板間には大きな囲炉裏が切られていて，室まぶりとか窯まぶりとか言われる太い梁の見事な天井

の木組みがこれを見下している。柱も框も戸襖も，凡そ木という木は真黒なしかも無煙炭のような力強い光沢の沈黙を守っている」と描写される。土橋邸の囲炉裏と竈が連想される。(「藁工品とその作者」『火の誓い』(講談社学芸文庫，1996) pp. 21-22。「藁工品とその作者」の初出は，昭和8年12月)。川島智生「玄琢山荘の成立と建築特徴について」『民藝』(2002年6月号) pp. 52-53では，京都のローカリティーの外観への反映を推測している。

(10) 前出「玄琢山荘の成立と建築特徴について」pp. 57-58において，川島は朝鮮風意匠の採用を，特徴として指摘している。

(11) 前出『現代和風建築集7・民家の伝統』による。これまで主屋の建築年代は，河井の家族からの聞取りによっていた。今回，河井から友人水谷良一への書簡により，このことを確認することができた(3月26日付「家今日荒壁付ケ次第ニ形が見エ出しマシタ」など)。

(12) 現在，河井寛次郎記念館の建築物としては，主屋の他，陶房，小間が残る。陶房は，既にあった物置を改修して陶房としたもので，聞取りによれば，昭和4年頃に完成したとされる。また，小間は河井の思索の空間として造られたもので，主屋と同時期の竣工とされる。

(13) 安来の大型町家である並河家は，妻入の入母屋屋根としている(和田嘉宥「在町安来町と並河家住宅」(平成2年3月日本建築学会中国・九州支部発表)。並河家をはじめ島根県東部の町家では，土間境の畳室を吹き抜けとする構成が見られる。

(14) 河井「町の教壇」『六十年前の今』(東峰書房，1968) p. 59

(15) 河井「部落の総体」『火の誓い』(講談社学芸文庫，1996) p. 15。「部落の総体」の初出は昭和19年7月。

(16) 大竹幹「故郷の意匠・河井寛次郎を軸に」1996年度筑波大学修士論文)では，朝鮮の両班の平面との類似性を指摘している。

(17) 『工藝』92号(1938) 図版及び図版解説 p. 13，p. 83。

(18) 西郊辰三郎『うつくしいはなし』(芸艸堂，1985) p. 174，p. 188。

(19) 『川勝コレクション特選集』(平凡社，1971) p. 208。

(20) 前出(19) p. 208。

(21) 河井「朝鮮の旅」『炉辺歓語』(東峰書房，1978) p. 65。

(22) 河井「火・釉薬」『炉辺歓語』pp. 99-100。また，河井は囲炉裏との出会いについて，少年時代に郷里・安来の鍛冶屋を覗いた際に見た新鮮な印象として「町家では囲炉裏を使はなかったので，子供達はここで初めて自在鍵を知った。其の自在鍵の鍋で煮られる惣菜や雑炊(中略)ここでは何よりも火に魅入られた」と記している。河井「町の教壇」『六十年前の今』(東峰書房，1968) p. 62。

(23) 河井寛次郎記念館所蔵。

(24) 1931年生まれ。神戸高等工業学校卒業。竹中工務店勤務を経て，宮地建築設計事務所を開設。大阪民芸協会，兵庫民芸協会の理事を務める。宮地米三，伊東安兵衛『民芸建築図集』(四季社，1958) 著者紹介による。

(25) 宮地米三，伊東安兵衛『民芸建築図集』(四季社，1958) の巻頭辞「民芸風建築について」。宮地は

「昭和十二年頃」と回想しているが，後出㉖により，昭和14年と確認される。

㉖ 膳部朗「神戸竹葉亭印象記」『月間民芸』（1939年８月号）挿図に，写真入りで店舗が紹介されている。

㉗ ひさご家オーナー・松本雄介氏からの聞き取りによる。

㉘ 『くらま』387号，（鞍馬寺発行，1964）p. 1による。

㉙ 宮地米三「鞍馬山歓喜院の民家風建築について」前出『くらま』387号，p. 8

㉚ 前出「民芸風建築について」『民芸建築図集』。

㉛ 前出『民芸建築図集』には，宮地の作品が紹介されており，しばしば，テーブル式の囲炉裏が用いられているのが確認できる。

㉜ 河井「三國荘」『工藝』60号（1936）p. 53

㉝ 河井須也子「「木彫猫」誕生由来記」『近代陶芸の巨匠　河井寛次郎の世界』展図録（日本経済新聞社，1999）p. 143，杉浦美紀「河井寛次郎と木の造形」『表現者　河井寛次郎展』図録（浅野研究所，2004）pp. 139-140。

㉞ 松原龍一「河井寛次郎の陶芸作品」『没後30年記念　河井寛次郎展』図録（日本経済新聞社，1995）p. 15。

㉟ 河井「作り手の立場」『炉辺歓語』（東峰書房，1978）p. 202。